



Title	ホームレスに対する支援のあり方に関する研究：書店を併設したシェルターの入居者の語りから
Author(s)	長嶺, 卓
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88593
Type	bachelor thesis
File Information	2022nagamine.pdf



令和4年度卒業論文

ホームレスに対する支援のあり方に関する研究
～書店を併設したシェルターの入居者の語りから～

北海道大学 文学部
人文科学科 人間科学コース 地域科学研究室
指導教員 宮内 泰介 教授
学生番号 01180085
氏名 長嶺 卓

目次

1 研究の背景と目的	3
1-1 研究の背景と目的	3
1-2 調査手法について	3
1-3 論文の構成.....	4
2 ホームレスの定義と札幌市における支援体制	5
2-1 ホームレスとはどのような人か.....	5
2-1-1 法的な定義と概数	5
2-1-2 「概数」に留まる理由	6
2-1-3 法的定義を超えたホームレスの定義.....	7
2-1-4 ホームレスの人とはどのような状態にあるのか	7
2-1-5 実際に行われている支援活動	9
2-2 札幌市におけるホームレス支援団体	10
2-2-1 北海道の労働と福祉を考える会（＝労福会）	10
2-2-2 札幌市ホームレス相談支援センター（愛称：JOIN）	11
2-2-3 その他の支援団体について	12
2-2-4 「Seesaw Books」という新たなシェルター	12
2-2-4-1 Seesaw Books の概要.....	12
2-2-4-2 シェルター事業開始の背景	12
2-2-4-3 Seesaw Books におけるシェルター事業の経過	14
2-2-4-4 Seesaw Books の建物について.....	14
3 支援のあり方に関する考察～Seesaw Books 入居者の語りから～	17
3-1 アフターフォローにおける可能性	17
3-1-1 ホームレスを脱却したその後に待ち受けるもの.....	17
3-1-2 アフターフォローに対する複数の立場.....	19
3-1-3 新たな「依存先」としての Seesaw Books	21
3-2 支援者—被支援者の関係	22
3-2-1 「友達になる」という関係.....	22
3-2-2 「線を引く」という関係.....	23
3-2-3 当事者の問題を「自分事」として捉える	24
3-2-4 「ラポール」はいかにして形成されるか	25

3-3 ホームレスの人は「他人」なのか	26
3-3-1 「劣等処遇」という考え方	26
3-3-2 被支援者は「受援者」に留まるのか	27
3-3-3 居住者による「自治」	30
3-3-4 「他人事」ではない世界	32
3-4 「支援」のあり方に関する考察	33
4 おわりに	36
5 参考文献	37

1 研究の背景と目的

1-1 研究の背景と目的

ホームレスの状態にある人に対する支援としては、まず目下の物質的な困窮に対する支援が必要である。例えば、炊き出しなどを通じた食料や衣服の配布であったり、生活保護などの諸制度に当事者を繋ぐことであったり、取り急ぎの住居を提供することであったり、といった内容が挙げられる。このうち、取り急ぎの住居については、「シェルター」と呼ばれており、札幌市でも「札幌市ホームレス相談支援センターJOIN」が行政の委託を受ける形で事業を実施している。ホームレスという語に「ホーム」という言葉が含まれるように、逆に考えるとホームレスの状態を脱するためには、新たな「ホーム」を見つけるための支援が必須であり、シェルターはホームレス状態とその後の状態の間を繋ぐ存在でもある。

詳細については後述するが、コロナ禍のシェルターの収容人数の不足も背景としつつ、札幌市で「Seesaw Books」という新たなシェルターが誕生した。現在は、書店とシェルターを併設した形で運営が行われているのであるが、これはかなり特殊な事例である。シェルターと書店という組み合わせではないが、類する事例として、生活保護法に基づく厚生施設にコミュニティ・カフェを設置した事例についての報告（堀江，2012）があるものの、少なくとも職員と居住者の関係性の点においては少々異なるし、札幌市では類する事例はない。

通常とは異なる形での支援について検討することは、支援のあり方について見つめ直す一つの契機を与えてくれるものであると考える。したがって、Seesaw Booksでの支援について検討しながら、ホームレス状態にある人に対する支援のあり方について考察を試みるのが本研究での目的である。筆者自身、札幌市におけるホームレス状態にある人に対する支援に関わってきた。多くのケースに向き合う中で、よい支援ができたと思える時もあれば、そうは思えない時も度々あった。その中で、Seesaw Booksの取り組みについて興味を持って調べることを通じて、いくつかの可能性を見た。特に、アフターフォロー（＝支援終了後に行われる継続的な関わり）について、そして、支援を専門としない人が支援に携わることによる支援—被支援の関係性のあり方についてだ。筆者自身まだ支援者としては経験や知識が浅い未熟者ではあるが、あくまで現時点での考えを整理することを本稿にて試みる。

1-2 調査手法について

以上の背景と目的を踏まえ、本研究では、Seesaw Booksの（元）入居者に対するインタビューに重きを置きつつ、Seesaw Books経営者の神輝哉さんに対するインタビュー、Seesaw Booksにて行われた炊き出し活動での参与観察、そして文献調査を併せて行なった。（元）入居者へのインタビューについては、依頼を受けて下さった3名の方に実施している。ま

た、筆者が文学部専門科目である「野外調査法実習」（2020年度開講）を受講した際に札幌市ホームレス相談支援センターJOINの職員の方に対して実施したインタビューについても活用させて頂いた。まとめると、以下の7名の方のインタビューを活用している。

表 1 インタビューの対象者及び実施日

対象者	役職・立場	インタビュー実施日
Aさん	Seesaw Books 元入居者	2022年10月25日
Bさん	Seesaw Books 元入居者	2022年11月7日
Cさん	Seesaw Books 入居者	2022年12月7日
神輝哉さん	Seesaw Books オーナー	2021年4月5日 2022年8月2日
小川遼さん	JOIN 職員兼労福会副代表	2020年8月10日
塚越修さん	NPO 法人「みんなの広場」副理事長	2020年8月1日
山崎貴志さん	NPO 法人「ベトサダ」元代表	2020年6月25日

(筆者作成)

加えて、筆者は先に述べた支援団体である北海道の労働と福祉を考える会の会員、兼 JOIN 非常勤職員として日々支援活動に関わっているのであるが、その中での経験についても、執筆時の参考としている。

1-3 論文の構成

本稿では、まず第2章にて「ホームレス」という言葉の定義及び札幌市で行われている支援について第1章で述べた背景をより深める形で述べて本論への前座とする。続く第3章の本論で、支援のあり方についての考察を行う。トピックごとに整理してはいるものの、一つの語りから考えられるトピックは複数あるため、語りを繋ぎとしつつ論を展開していくという形式を採っている。最後に第4章においては、それまでの議論のまとめと、本研究に残された課題について述べる。

2 ホームレスの定義と札幌市における支援体制

2-1 ホームレスとはどのような人か

2-1-1 法的な定義と概数

これまで「ホームレス」という言葉を用いてきたが、研究の背景として、いわゆるホームレスとはどのような人であるのか、ということをもとに初めに考えたい。それに当たって、法的な定義を参照することから始める。ホームレスの人に関連する法律として主要なものは、「生活困窮者自立支援法」（以下、自立支援法）及び「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（以下、特別措置法）が挙げられるが、ホームレスの定義については、特別措置法に記述がある。そこにおいては「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場とし、日常生活を営んでいる者」¹とされている。

特別措置法においては、ホームレスの実態に関する全国調査を行うことが定められており²、先に述べた定義に基づいたホームレスの人数が毎年1月ごろに調査されている。以下が、ここ10年における全国のホームレスの人数の推移を表したグラフである。

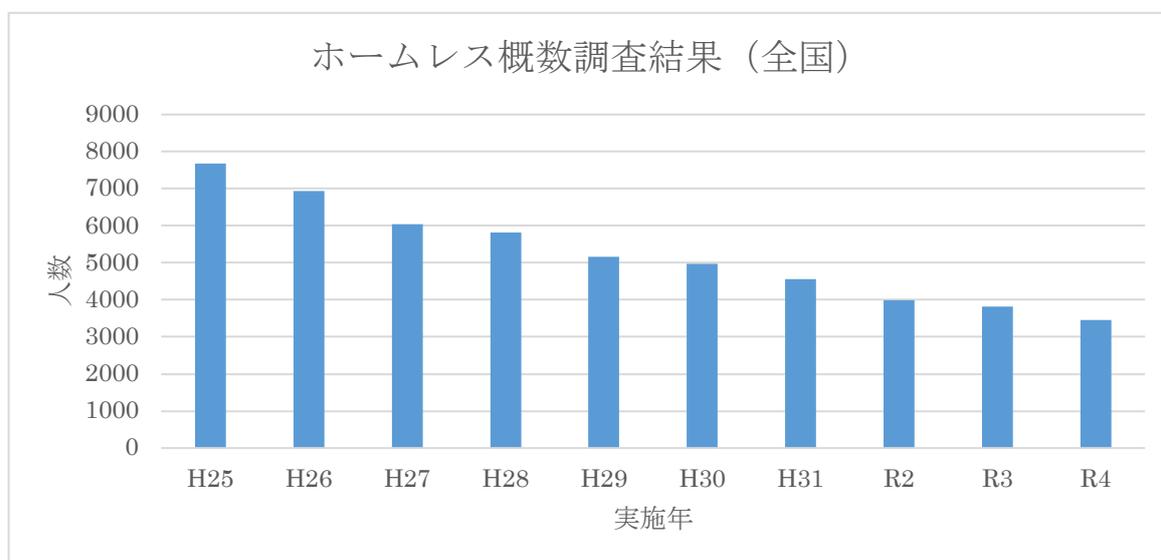


図 1 法的な定義に基づくホームレスの人数（全国）推移

（ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果 厚生労働省
<https://www.mhlw.go.jp/content/12003000/000931322.pdf>
より筆者作成）

¹ 特別措置法第二条より。

² 特別措置法第十四条より。

概観すると、ホームレスの人の数は減少していることが窺える。なお、この概数調査に関しては市区町村の単位で行われているため、札幌市においても調査が行われている。札幌市における人数の推移については、以下のグラフの通りである。

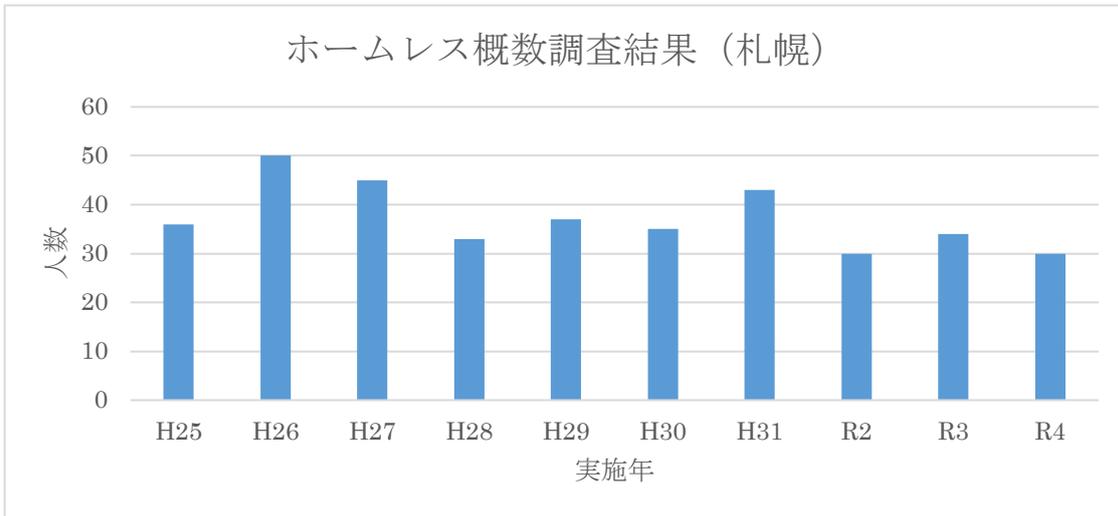


図 2 法的な定義に基づくホームレスの人数（札幌市）推移

（ホームレスの実態に関する全国調査の概要（北海道分） 北海道保健福祉部福祉局地域福祉課

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/feg/hljittai.html>

より筆者作成）

ここ 10 年に関しては、おおよそ 30 人前後で推移していることが窺える。先ほど示した全国単位でのグラフと違い、特段の減少傾向は見られない。

2-1-2 「概数」に留まる理由

先に挙げた数値についてであるが、これらはいくまでもホームレスの「概ね」の数に留まると考えている。その理由は主に二つある。

一つは、調査の手法の問題である。この調査は目視調査となっており、例えば夜間に移動を続けているホームレスの場合、（調査する側も特徴をひかえるなどの策は講じているものの）重複計上してしまう可能性は否めない³。特に札幌の場合は、路上生活を始めて日が浅い人の場合、風雪を凌げる場所についての知識がないので、凍死を防ぐために一晩中歩くとする人もいと考えるため、重複形状の可能性は高くなる。

もう一つは、この数値があくまで法的な定義に基づくホームレスの人数に留まる、という

³ 実際に筆者が概数調査に参加した際の経験に基づく。

ことが挙げられる。例えば、「ネットカフェ難民」と呼ばれる人たちや「車上生活者」と呼ばれる人たちについては、基本的に⁴計上されていない。加えて、実際に JOIN で相談を受ける際にも、路上生活者からの相談よりは、それ以外の人からの相談を受けるケースが多い⁵ことから、実際には「概数」より多くのホームレスの人がいることが考えられる。

2-1-3 法的定義を超えたホームレスの定義

先に挙げた、「ネットカフェ難民」や「車上生活者」については、その実態について共通理解が得られていない現状がある。なお、前者については、公的な用語を用いると、「住居喪失不安定就労者等」という呼称があり、平成 19 年度に厚生労働省により行われた調査によれば、全国で約 5400 人に上るとの推計があるが、この調査についても電話調査によるものであり、必ずしも正確な数を示しているとは限らず⁶、かつ調査から期間が空いていることから、現在の人数については定かではない。また、後者については少なくとも全国的な調査が行われたことはなく、正確な人数については分からない。

しかし、いずれにせよ住居がないという点においては、広義の意味でのホームレスに該当すると考えられる。したがって本稿においては、これらの人々も含む、「何らかの事情で住居を失った人」全員をホームレスとみなして論を進める。

2-1-4 ホームレスの人はどのような状態にあるのか

先に挙げたような広義の意味でホームレスという言葉を使えた時、その中にはどのような状態の人が含まれるか、ということについても少し述べておきたい。

例えば、北九州で長年ホームレスの人に対する支援を行っている奥田知志は、いわゆる「ホームレス」と呼ばれている人々は、物質的困窮状態である「ハウスレス」に加えて、帰属の場所としての「ホーム」(＝「関係」)をも失ったという複合状態にあると指摘している(奥田, 2006: 14-15)。これは、「何らかの事情で住居を失う」までに、他者との関係性を失うという過程があったのではないかという指摘である。これは、実際に筆者がホームレスの人への支援活動に携わる中でも感じることは多い。例えば、筆者は生活保護申請に同伴することがよくあるのだが、生活保護法において「扶養義務者の扶養及び他の法律に定める扶助は、すべて法律による保護に優先して行われるものとする⁷」という内容が規定されているために、申請者にかかる扶養義務者(＝親族)に関する話を耳にすることが多くある。そ

⁴ 札幌市においては、令和 4 年から車上生活者については計上している。

⁵ 筆者自身が JOIN の職員として関わる中での経験から。

⁶ 「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書」 厚生労働省職業安定局 <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/08/dl/h0828-1n.pdf> より。

⁷ 生活保護法第四条の 2。

の際に、頼れる親族がいる、ないし見つかるケースはほぼない。

奥田の指摘は、直接的な金銭的援助に留まるものではないだろう。例えば、頼れる友人や知人がいれば、職業の斡旋や取り急ぎの食住の提供を受けることができる可能性があり、ホームレスになるリスクは少なくなると考えられる。無論、中には「好き好んで」ホームレス状態になっている人もいるのかもしれないが⁸、そうではなくそうならざるを得なかった事情を持っていると考えた際には、その事情の中に関係性の欠如があるということは大いに考えられる。

同様の内容について、湯浅誠は「溜め」という言葉を用いて表現している。「溜め」とは、有形無形問わず人に関わる様々なものの「余分」と呼べる概念であり、例えば貯金などが該当し、これを人間関係で考えると「頼れる人間がいる」ということも「溜め」に相当するのであるが、ホームレスの人や生活困窮者は、この「溜め」を欠いている、ということを湯浅は指摘している（湯浅，2008：78-80）。

ただし、ホームレスの人がその状態に至るまでに（人間関係を含む）「溜め」を失う過程があったにしろ、今必ず孤立状態にあるかという、必ずしもそうであるとは言えない。意外にも、ホームレスの人の中にもコミュニティのようなものが存在することはある。札幌市における路上生活者支援団体である「北海道の労働と福祉を考える会」（＝以下、労福会）で長年活動している小川遼さんはこう言う。

例えば、よく夜回りで会っている「○○○さん」っていうおじさんいるじゃないですか。テレビ塔の、一番わかりやすい人かなって思うんだけど。彼なんかは、いつも人々に囲まれて仲良く酒を飲んでいるし、謎な序列関係とかがあって、新参者のホームレスが「お前○○○さんのところにまだ挨拶に行っていないのか」って行って怒られたりとかするような。そういう意味ではむしろなんか、普通に労働している人よりはもしかしたら逆に強い紐帯というか関係性のネットワークの中にいるという風に考えることもできるかなっていう⁹。

起居の場がない一方で、関係性のネットワークを構築してその中で生きているホームレスの人もいるという指摘である。序列関係について補足すると、ホームレスの方が複数名寝泊まりしている風雪を凌ぐことができるとある場所においては、寝る場所にも「古参の人は北側、新参の人は南側」といった序列が存在する、といった内容についても耳にしたことがある¹⁰。これ以外にも筆者が経験した話として、ある日労福会の携帯に、「ホームレスの人が階段から落ちて倒れている」という連絡が入ったこともあった。すぐに緊急通報すべきとい

⁸ この議論は世間で耳にすることがままあるが、支援に関わる筆者の経験から語ると、そのような人はほとんどいない。理由を語らない人にしても、支援に関わる中である日突然「そうせざるを得なかった」理由を語るようなケースは多い。

⁹ 労福会 副代表 小川遼さんへのインタビューより。（2020年8月10日実施）

¹⁰ 労福会が実施する「夜回り」での会話から。（2020年）

う議論はさておくとして、このエピソードからも、声はかけずとも互いの存在は認識しており、急を要する場合には対応をするなど、緩やかなネットワークが存在することが窺える。

これらから分かることは、「ホームレスの人であるから必ず孤立しているはずだ」という考え方は、理解の仕方としては少々誤っているということであろう。また、少し発想を転換すると、もしホームレス状態を脱した時に行き着く先が「孤立」した状態であるならば、逆に路上の方が居心地は良かった、となってしまう可能性もあると考えられる。

もう一つ、ホームレスになる人の特徴として、全員に認められるわけではないのだが、何かしらの障害や（精神的な）疾患を持っている人が多いということも挙げられる。例えば、札幌市でホームレスの人に対するシェルターの提供事業を行っている NPO 法人である「みんなの広場」副理事長の塚越修さんは以下のように語っていた。

去年一年間に、「みんなの広場」で約100 人くらいのホームレスになった方が入っただけで、40%くらいの方は、障害を持ってる、知的障害、精神障害だとかそういう障害の方がいると思っています¹¹。

障害があることにより、例えば就職や一人暮らしがうまくいかないといった問題を抱えてしまい、それが原因でホームレスになってしまった人が一定数いるのではないかという指摘である。こういった方の場合、その障害について向き合うことを検討しない限り再びホームレス状態となってしまう可能性は十分に考えられる。実際に、シェルターでの支援を行う上では障害者手帳の交付を支援することもあるそうだ¹²。

総じて、ホームレスの人と一言で言っても、その人たちの状態は多様である。したがって、「ホームレスの人は必ずこうである」といった議論は難しく、支援を行うにあたってはその多様な人たちに合わせた支援が展開される必要があるということが言えるだろう。

2-1-5 実際に行われている支援活動

実際に行われている支援活動については、路上生活者に対するものと、そうでない人（ないし脱路上しようとしている人）に対するもの二つがある。路上生活者に対する活動としては、主に取り急ぎの食料や衣服の提供が挙げられるだろう。これらについては、炊き出しなどの形で行われており、また同時にそれらの活動を行っている団体を周知することについても支援活動の一環と考えられる。

そうでない人に対する支援としては、取り急ぎの住居（＝シェルター）及びその間の食料

¹¹ NPO 法人「みんなの広場」 副理事長 塚越修さんへのインタビューより。（2020年8月1日実施）

¹² NPO 法人「みんなの広場」 副理事長 塚越修さんへのインタビューより。（2020年8月1日実施）

等を提供し、そこにいる期間の間に、シェルター退去後の生活の目処を立てるという考え方がある。シェルターを出た先の生活の立て直し方として主なものは、生活保護の受給であるが、場合によっては高齢者向け施設やグループホームなどへの入居も視野に入れて、その後の生活について考える必要がある。

これらの支援については、当然札幌市でも展開されているが、その実施をしている団体について、代表的なものを以下に記す。

2-2 札幌市におけるホームレス支援団体

2-2-1 北海道の労働と福祉を考える会（＝労福会）

札幌市に路上生活者支援団体はいくつかあるが、そのうちの一つである北海道の労働と福祉を考える会（＝労福会）は、1999年に実施された北大教育学部椎名恒教授のゼミでの路上生活者の調査をきっかけとして結成された組織で、「夜回り」という活動を主に行っており、これに加えて、炊き出しや健康診断、行政の委託を受けての人数調査、生活保護や新型コロナウイルス感染拡大に伴給付金の申請の援助などの活動を行っている¹³。「夜回り」とは、札幌市中心部の路上生活者に対して、パンなどの軽食糧、カイロやマスクといった生活用品を配布しながら、生活の状況についての聞き取りを行う活動で、現在はほぼ毎週土曜日に開催されている¹⁴。

大学の教授や大学生¹⁵、行政職員、民間勤務者などの多様な人々から構成されている。また、先に挙げた小川遼さんのように、JOINの一員として活動を行いながら労福会で活動している方も数名存在している。これらから、単なる支援団体にとどまらず、支援者間で情報共有を行うハブのような役割も果たしていると考えられる。

また、小川遼さんは次のように語っている。

救急車呼べよってという状況で労福会に電話してきたりします。その人もう本当に記憶がなくなっちゃって、脳膿瘍って言って耳から菌入って膿んでくみたいなやつで、脳味噌浸食されていって、ろくに喋れなくなって動けなくなってるんだってという電話が労福会に。早く救急車呼べよってという話なんだけど。当時の事務局長だった学生が電話取って、彼が直接現場行って、いやこれは救急車だろって言って救急車呼んだみたいなんだけど。でもそのくらい信頼はされている団体ですよ、路上生活者たちと。だから本当に、外で寝泊まりしている人と関係作っているのは、札幌だと労福会

¹³ 労福会ホームページ

(https://www.roufuku.org/?page_id=2203) から。

¹⁴ 「夜回り」活動への参加の経験から。

¹⁵ 筆者自身、2年ほど前から活動に参加しており、2021年度については事務局長を務めた。

が一番なんじゃないかなという風に思います¹⁶。

この語りから、「夜回り」や炊き出しといった活動の中で路上生活者と緊密な関係を築いており、路上生活者からの信頼が厚い団体であるということが分かる。

2-2-2 札幌市ホームレス相談支援センター（愛称：JOIN）

札幌市ホームレス相談支援センター（JOIN）は、生活困窮者自立支援法（以下、自立支援法。）に基づく生活困窮者自立相談支援事業・一時生活支援事業¹⁷の委託先として札幌市の委託を受けて、家を失った方に対する支援を行っている団体であり、一般社団法人 札幌一時生活支援協議会（以下、協議会）が実施を行っている。一つの相談窓口及び4つのシェルター（「分室」と呼ばれている。）から構成され、相談を受けた窓口が、その人のケースに応じて適切な分室に振り分けていくという形を採っている。それぞれの分室には例えば女性支援や障害者支援に特化するなど特定の専門領域があるが、居住場所や食事の提供などはその分室でも共通している。それぞれの分室の概要に関しては以下の表のとおりである。

表 2 JOIN のシェルター一覧及びその実施団体、対象者等について

分室名	実施団体	対象	備考
女性サポート アジール	NPO法人女性サポートAsyl	女性	女性のみ、家庭内問題なども支援
ベトサダ	NPO法人自立支援事業所ベトサダ	男性	就労支援が主目的
みんなの広場	NPO法人みんなの広場	男性・女性	障害者や刑余者の受け入れ
コミュニティハウス「れおん」	NPO法人コミュニティワーク研究センター	男性・女性	障害者の方が主な対象

（JOIN 発行のパンフレット及び JOIN 職員小川遼さんへの聞き取りから筆者作成。）

相談の経路としては、区役所の保護課や警察といった公的機関からの他、自分でネットを調べて情報を得た人や、路上で生活していて労福会の仲介を経て相談に来る人もいる¹⁸。支援のスタイルとしては、まず初めに相談を聞き、その人にとってシェルターの利用が最適解であるかを検討した後に、シェルターが必要となる場合には相談者とともに今後どのように生活を立て直すかという計画である「プラン」を作成し、それに則った形で支援を行っていく、というスタイルを採っている¹⁹。

¹⁶ 労福会 副代表 小川遼さんへのインタビューより。（2020年8月10日実施）

¹⁷ 自立支援法第四条に規定されている。

¹⁸ 実際に筆者が JOIN 非常勤職員として勤務している中での経験に基づく。

¹⁹ 実際に筆者が JOIN 非常勤職員として勤務している中での経験に基づく。

2-2-3 その他の支援団体について

その他にも、ホームレスの方を主たる対象とした炊き出しをしている団体や、何かしらの事情で急に家を出なければならなくなった人からの相談も受け付けている不動産会社、無料低額宿泊所など、支援団体はいくつか存在する。また、一部では、「シェルターの提供」と銘打って自社保有の物件に住まわせて生活保護の申請をさせて保護費を掠め取るという、いわゆる「貧困ビジネス」²⁰のようなことをしている団体も存在しているようである²¹。

2-2-4 「Seesaw Books」という新たなシェルター

2-2-4-1 Seesaw Books の概要

札幌市においてシェルター事業を展開している主な団体は先に述べた JOIN であるが、2021年に札幌市において「Seesaw Books」という新たなシェルターが誕生した。経緯を簡単に記すと、コロナ禍の2020年に、JOINに対して住居を失った人からの相談が増加していたのであるが、それにあたりシェルターの枠を増やす必要があり、その委託先として浮上したのが「UNTAPPED HOSTEL」というゲストハウスであった。そして、オーナーの意向もあって、委託契約終了後もシェルター事業を続けることとなり、その際に建物を改築して新たに作られたのが、Seesaw Books というシェルターである。

Seesaw Books は「Books」とある通り、書店を併設したシェルターであり、従来のシェルターとは特徴を異にする点が多い。例えば、シェルターの住環境について述べると、「家を失った人に取り急ぎの住まいを提供する」というホームレス支援の特性上、他のシェルターではともかく「住めること」が最重要視され、住環境の良し悪しは重視されない²²傾向があるが、Seesaw Books はその前身がゲストハウスであったこともあり、住環境としては良い。加えて、シェルターの職員が直接的な支援活動に従事していないことも、一つ特徴として挙げられる。このシェルターについてももう少し詳しく以下に記す。

2-2-4-2 シェルター事業開始の背景

Seesaw Books は札幌市北区の北18条駅のすぐ近くにある UNTAPPED HOSTEL というゲストハウスの敷地内にあり、かつてはゲストハウスとして活用されていた建物である。この建物をシェルターとして活用することとなった背景には主に以下に挙げる3つの状況がある。

²⁰ 湯浅誠（2008：191-197）によれば、「貧困層をターゲットにしている、かつ貧困からの脱却に資することなく、貧困を固定化するビジネス」のことを指す。

²¹ 2022年10月4日 労福会での支援活動にて筆者が対応したとある男性との会話から。

²² 例えば、JOINのシェルターの大半は、アパートを借り上げて活用しているが、建物の築年数については、家賃の兼ね合いもあり決して浅くはなくなっている。

一つ目としては、シェルターの需要が増加していたことが挙げられる。札幌市において主にシェルター事業を展開しているのは、先に登場した JOIN であるのだが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、JOIN への相談件数は増加していた。具体的には「家賃を払えない」といった相談が増えていたようだ。しかし、シェルターのキャパシティにも限界がある²³。そこで、新しくシェルターを用意する必要が生じていた。

二つ目としては、ゲストハウスの利用者が大幅に減少していたことが挙げられる。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、UNTAPPED HOSTEL の宿泊利用者も大きく減少していた。当時の状況について、オーナーの神輝哉さんは以下のように述べている。

2020年2月の雪まつりを過ぎたあたりからパタリと客足が泊まり（※原文ママ）、私たちも危機感を募らせました。最初の緊急事態宣言がなされ、売り上げも昨年比90%以上の減少に²⁴。

このような状況下で、なんとかしてこの場を存続させる方法を模索していた。

三つ目としては、オーナーの神輝哉さんの貧困問題への関心が挙げられる。ゲストハウスの活用方法について模索する中で、どうしてシェルターとしての活用を考えたのかという理由について、神輝哉さんは以下のように語っていた。

大学の時の友人が Facebook 上でネカフェ難民が増加しているってというようなニュースをシェアしていて、それを見て自分もシェアをしたんだけど、これは東京だけの問題じゃない、都市圏、名古屋なり福岡なり大阪なり仙台なり札幌なり、これはこの今の現状を考えるとどこでも起こりうる問題だっというような文章を確か添えて Facebook 上でシェアしたんだけど、シェアした後に、自分も居心地悪くなったというか気持ち悪くなったというか。シェアしただけでやったような気持ちになりやすいじゃん？その自分の気持ち悪さを感じて、なんか行動に移せないかなっていう風に考え始めて、（略）²⁵

この語りの通り、偶然にネカフェ難民の問題について触れた折に、自分がその状況をいわば客観視している状況にある種の気持ち悪さを感じたことが、利用者が激減しているゲストハウスをシェルターとして活用することができないかという発想に繋がった。その後、札幌市におけるホームレス支援団体について調べる中で、労福会の存在について知りコンタ

²³ 想定されていた枠としては具体的には47名ほどであるが、感染症対策のために1部屋に入ることができる人数を制限するなど、より厳しい状況であった。

²⁴ 「札幌に、カルチャーと公共の境界線を溶かす『書店+シェルター』をつくりたい！」
<https://camp-fire.jp/projects/view/449809>
より。

²⁵ 神輝哉さんへのインタビューより。（2021年4月5日実施）

クトを取ったところ、労福会副代表兼 JOIN 職員である小川遼さんに繋がり、JOIN と連携してシェルター事業を始めるに至った²⁶。

2-2-4-3 Seesaw Books におけるシェルター事業の経過

当初は、JOIN の相談件数の増加に応じてシェルターの枠を増やすために、札幌市からの委託契約を受けてシェルター事業を開始した。その際には、入居者の有無に関わらず借り上げられているベッドの数に応じて1日当たり2500円、実際に入居者が入った場合には食費としてそこに1日当たり1500円を乗せるという形で契約を交わしており、宿泊者が激減していた当時の状況からすると、それはかなり救いになったという²⁷。2020年10月に札幌市によるベッド借り上げの契約が切れた後も、JOIN が民間の助成金を獲得して、それを資金源とする形で、JOIN と提携する形でシェルター事業を実施していた。

その後、シェルター事業を続けようと模索する中で、市の委託や助成金を受けずに独自でシェルター事業を続けていくにあたっては宿泊業とは別の収益事業を作る必要があり、神さん自身の関心もあり「書店を併設したシェルター」を構想するに至った。これにあたり、資金が必要であったため、クラウドファンディングを実施したところ、目標額150万円のところ732万円が集まるという大成功を収め、無事に2021年12月ごろよりシェルター事業を再開し、今に至っている。上記の経過について表にすると、以下の通りである。

表 3：Seesaw Books のシェルター事業にかかる年譜

2020年5月	札幌市によるベッド借り上げ開始
2020年10月	札幌市によるベッド借り上げ終了
2020年11月	「休眠預金」及び「READYFOR」(＝クラウドファンディング)を資金源としてシェルター事業を継続
2021年3月	上記の助成金が終了
2021年8月	クラウドファンディング https://camp-fire.jp/projects/view/449809 開始。
2021年10月	建物改修完了
2021年12月	シェルター受け入れ再開

2-2-4-4 Seesaw Books の建物について

先ほど Seesaw Books について、「書店を併設したシェルター」であることを述べたが、こ

²⁶ 「札幌に、カルチャーと公共の境界線を溶かす『書店+シェルター』をつくりたい！」
<https://camp-fire.jp/projects/view/449809>
より。

²⁷ 神輝哉さんへのインタビューより。(2022年8月2日実施)

ここで Seesaw Books の建物についても整理しておきたい。基本的には、1階には書店があり、2階にはシェルターがあるという構成となっている。うち、以下に挙げる図は先述したクラウドファンディングの際に作成されたものであるが、概ね1階の書店部分の様子はこの通りとなっている。



図3 Seesaw Books の1階部分の概観図（クラウドファンディングサイト²⁸より引用。）

一般的な書店と比して特徴的な点としては、カウンター部分がいわばバーの様に椅子が配置されていることや、壁以外の棚については移動が可能となっており、机等を配置することでトークイベント等を行いやすい作りになっていること、が挙げられる。特に前者については、図1左上に記載がある「ずっと居てよい空気」を作るための工夫の一つである。

シェルターについては、新台が複数ある寝室と食事スペースから構成される。それらについての写真は以下に示す図の通りである。

²⁸「札幌に、カルチャーと公共の境界線を溶かす『書店+シェルター』をつくりたい！」
<https://camp-fire.jp/projects/view/449809>



図 4：Seesaw Books の 2 階部分の風景。左上：寝室概観、右上：寝台、下：食事スペース。（筆者撮影）

寝室に関しては、元々がゲストハウスとして設計されているということもあり、ただ寝台が複数並んでいるだけではなく、壁の構造が複雑になっており、各ベッドについては、通路ないし他の居住者から見えないような工夫がなされている。食事スペースについては、共用の家電製品やレトルト食品が置かれており、居住者によって整頓されている。

ここまで、背景的な知識及び Seesaw Books の概要について述べてきたが、以下より本論に入る。

3 支援のあり方に関する考察～Seesaw Books 入居者の語りから～

3-1 アフターフォローにおける可能性

3-1-1 ホームレスを脱却したその後に待ち受けるもの

支援のあり方について考えていくにあたり、「支援のその後」に何があるのか、ということについてまず考えたい。ホームレス、という言葉について、とにかく「何らかの事情で住居を失った人」ということにして考えてきた。したがって、住居（及び生活の手段）を確保することが第一の目標となる。では、住居を確保すればそれで良いのだろうか。以下は、労福会の支援により路上生活を脱したとある男性を筆者が訪問した際の記録である。

かつて労福会で支援していた〇〇さんの家を訪れた。最後に行ったのは、確か雪が降る前、おそらく去年の12月ごろで、おおよそ1年の時間を空けてしまったこととなる。

〇〇さんは60代の男性。携帯電話はお持ちの方ではないので、アポをせず突然訪問することとなってしまった。玄関のドアの上がガラス戸形式となっていて、微かに光が漏れ出ていることが確認できたので、恐る恐るチャイムを鳴らした。

玄関を開けて出てきてくださった〇〇さんは変わりない様子で、心なしか嬉しそうに迎えてくれた。本当に久しぶりです、とかお元気でしたか？とか当たり障りのない話をした。

部屋の様子であるが、キッチンのシンクは綺麗にされていて、部屋の床にもあまり物は置いてはない。机の上には解きかけのピクロス²⁹が置かれていて、テレビでは時代劇が流れていた。個人的な印象としては、脱路上の後にゴミ屋敷化してしまう人は結構多い印象なのであるが、全然そのような様子ではなくて、少し安心した。

この部屋に概ね不満はないそうだが、一点、ガス代がコンロやシャワー等だけでも月当たり9000円くらいかかるそうで、それは気にされていた。暖房費を浮かせるために日中は外にすることが多いらしい。そして、夜の19～20時に帰ってくるということもままあるようだ。そういえば、他の脱路上した人の家にアポ無しで訪問した際も、日中の時間はいないということがよくあった。それも同様の理由かもしれないと思

²⁹ 数字に沿って指定されたドットを塗りつぶす、塗り絵のようなコンテンツ。

う。少し話が逸れたが、部屋の特に足元は割と寒い。ヒーターはつけているようだが（というかいくら路上生活を経験しているとはいえ、もうだいぶ寒い時期である。）出力を弱くしているのではないかと思う。給付金³⁰は申請したので幾分か楽になるかもしれないということはおっしゃっていた。（※生活保護受給中の方である。）

外に出ている、という話を出した後だったのだろうか、〇〇さんがふとこぼした。「やっぱ寂しいんだ、話し相手いなくて」。「土曜に街いたら労福の人と会えるかもしれないけどさ」と少し笑いながら続けた。少し言葉に詰まったが、「山内代表³¹とか、〇〇さんのこと知ってる人が見たら驚いちゃいますよ」と返した。不動産会社の人も、契約書（単年更新契約になっている）が送付形式のために入居以降に姿を見せたことはないという。出歩くこと自体はあるという、「昔っからこれが好きなんだ」と言って手を回す動作をしていた。狸小路の方の店で、ちょっとずつ今もやっているそう。「だから月の後半には（家に）いるよ」と言っていた。生活保護の支給日が1日なので、これに関してはよく聞く話ではある。部屋の様子を見るだに無茶な使い方はしていない様子ではあったが。

以前一緒に来た会員は東京の大学院に行っちゃったんですよ、という話から、〇〇さんの過去の職歴の話になった。「東京都心部はよく覚えているんだ」と。上野から山谷まで、日給7500くらいの仕事があり月に数度行っていたそう。工事・土木関係の仕事を多くしていたそう。他にも労働福祉センター(?)からの仕事も受けていたそうで、そこには日給5000円や7000円の仕事の斡旋を受けることができたようで、そちらについても活用していたそう。しかし、コロナ禍になり仕事が激減し、途中仙台のシェルターを利用して、札幌に来て路上生活をし、その後労福会に会ったらしい。

「あとはこんなことしたな」と指折り数えながら幾つかの職歴を語ってくれた。富山のダムの工事の話や、危険な法面の工事の話など。大変な作業だと思うし、確か入居の際に膝が悪いために2階ないしロフト付きは避けて欲しいという話をしていたと思うのだが、そう考えると体に影響はどうしても出る仕事だと思う。のだが、どこか楽しそうというか誇らしそうにも見えた。

そんな話をしたのち、「そろそろ帰りますね」というと、玄関の灯りをつけてくれた。リビングと玄関はドア一枚で隔てられているだけで、そういえば来たときに「微かに

³⁰ 「電力・ガス・食糧等価格高騰緊急支援給付金」。住民税非課税世帯を対象として、1世帯あたり6万（国庫負担5万、札幌市負担1万）が支給される。

³¹ 労福会の代表。

灯りがついている」と表現したが、玄関の明かりは付いてはいなかった。「また近日中に来ますね」という話をすると、「近く来たら寄ってよ」と言われた。また近日中に寄ってみようと思う。

これまでの生活について饒舌に語ってくれて、それ自体興味深いものであった。また、帰る際に電気を付けてくれるという心遣いは、とても嬉しかった。というのも、生活保護が保障する生活は、「健康で文化的な最低限度の生活」であり、その生活は決して楽ではない。電気代が高騰する中であっては、電気代も節約していることと思う。部屋に入れてもらった際に部屋が暗かったことからそれが窺える。

その饒舌さと気遣いの裏に、「やっぱ寂しいんだ」という心情が透けて見えた。ホームレスの方の中には、孤立状態にある人もいるということをはじめに述べた。これは、支援終了後に当事者が抱える孤立の話である。付言すると、何もこの人の事例からのみでなく、例えば、脱野宿生活を果たした人が社会的孤立を理由として再度路上に戻るようなことがあるという旨が報告されている（稲月，2014：16）し、脱路上後の方が路上生活時より炊き出しに行く回数が増えたという方の事例も報告されている（越橋，2018：15）。いずれにせよ、脱路上後や支援終了後に孤立を抱える当事者が多いということは概ね間違いない。ではどうすれば良いのだろうか。

3-1-2 アフターフォローに対する複数の立場

一通りの支援が終わった後に継続的に関わり続けることを、アフターフォローという。アフターフォローについては、実施すべきか否かも含めてさまざまな考え方がある。例えば、北九州で支援をしている奥田は「出会いから看取りまで」というトータルサポートが必要であるという考え方を示した（奥田，2006：21）。他方、逆に過度に干渉しない方が良いという立場もある。以下は、ベトサダの代表であった山崎貴志さんの語りである。

こっちからあえて出たやつに、出てって一か月経ったからこっちから連絡しようかなんていうのはない。人によって考え方は色々あるんだろうけど、もしかしたらそいつにとってうちにいた期間が、「黒歴史」かもしれないから。もう出た瞬間にここにいたことは忘れたって思ってるかもしれないからね。ただ、出ていくやつ全員に、それは当然仕事決まって出ていくやつもそうだし、生活保護のやつもそうなんだけど、なんかあったら、ていうかなんかあったらじゃ遅いから、なんかある前に連絡よこせと、相談しに来いと。そしたら、打てる手はいくつもあるから、まあとにかく、連絡してこいって話はするよ³²。

³² ベトサダ 代表 山崎貴志さんへのインタビューより。（2020年6月25日実施）

アフターフォローをするべきではないというわけではないが、少なくともこちらからの積極的な介入はしないという考え方である。実際に、そのように感じている人がいる可能性はあるため、どちらが良いということをここで結論したいわけではない。

労福会においても、アフターフォローについて議論が交わされたことはあるようで、当時の総会資料を参照してもその議論の形跡が窺える³³が、少なくとも、今は会全体としてアフターフォローを積極的にやっという流れはない。記録の中に、「約1年ぶりに」訪問したということを書いたが、有志の会員がたまに様子を見に伺うということに留まっている印象がある³⁴。

筆者が JOIN で仕事をするにあたっては、アフターフォローに相当すると思われる内容で来所してくる人が少なからず存在する。しかし、それは基本的に「何かしらの問題を（再度）抱えた人」に限られる。例えば、生活保護受給で物件を決めたものの、ゴミ屋敷化してしまう、家賃を滞納してしまう、といった内容だ。逆に言えば、特にそういった問題を起こさず、一人暮らしができている人に関しては、あまりアフターフォローの対象としていない³⁵。

ホームレス状態を脱した人が、その後に孤立状態にあるとすれば、それは問題であると思われるが、では積極的なアフターフォローをすればそれは解決するのか、という問題もある。

これは、自立支援という言葉で用いられる「自立」とは何かという問題にも関連してくるだろう。実は、「自立」という言葉は統一的な見解はない。そもそも「自立」なるものに懐疑的な立場もあって、例えば広瀬義徳は、「実際のところ『依存』可能な他者との関係が複数あるなかで何ほどか自己の自己性が表出することを『自立』と呼んでいるに過ぎないのではないか」という指摘をしている（広瀬，2020：9）。しかし、生活困窮者自立支援法という法律に基づいて活動を行っている以上、支援を行う各主体がそれぞれ独自に「自立」という言葉を定義して支援を行っている。JOIN職員の小川遼さんに関しては、この概念があまり好きではないとしたうえで、先に述べた広瀬の考え方に近いが、「依存³⁶先を増やす」という営みが近いのではないかと述べていた³⁷。筆者もこの考え方には賛成である。就労が必要な人であれば、「仕事」という依存先を作ること、障害者の方であればグループホームや作業所などの依存先を作ること、が例として挙げられるだろうが、そういった複数の依存先を本人が持っていることで初めて「自立」が可能となるのではないだろうか。

そのように考えると、少なくとも一人が積極的に介入したとして、「自立」の状態を作

³³ 北海道の労働と福祉を考える会 総会資料（2013年度）
<https://www.roufuku.org/dir/wp-content/uploads/2014/09/2013nendo-soukai.pdf>
から。

³⁴ 筆者自身が労福会の活動に参加する中での経験から。

³⁵ 筆者自身が JOIN の職員として関わる中での経験から。

³⁶ 本稿では、「頼れる場所／もの」の意味として扱う。

³⁷ JOIN 職員 小川遼さんへのインタビューより。（2020年8月10日実施）

ることができるか、いわば孤立を解消できるのか、という点には疑問が残る。

3-1-3 新たな「依存先」としての Seesaw Books

このような考え方に立った時、とある Seesaw Books の元入居者の A さんという方の語りには、いくつかの気付きがあった。以下はインタビューの抜粋である。

A：いや本当、シェルターっていうと暗いイメージ持たれている人いると思うんですけど、全然そういうことないし、あの、本当何回も言うけど今思うとね楽しい思い出しかない。友達も増えたしね。友達って言うと、スタッフ、神さんとか神さんの奥さんでしょ、とか、あと、〇〇さんと△△さんとか、あともうひと方いたと思うんですけど、スタッフの人とか、あと隣に食堂あるじゃないですか。

筆者：ありますね、「万春や」

A：うん、あそこの店員さんとちょっとお話をちょこちょことしたこともあるし、まあうろちょろしてたんですよあの辺、あの辺ていうかね。だからみんなと仲良くなったから、だから本当この辺来たら、小川さんとこ来て、あの話して、申し訳ないけど時間潰しっていう感じですけど、で、そのあと今日も行くけど、神さんところ行って、コーヒー飲んだりなんかして、時間潰そうかなって思っているんですけどね。

筆者：そういう場所ができたっていうのは、いいなあって。

A：いいっすよ。本当友達が増えたっていう感じで。僕こっち方面って知り合いいなかったんですよね。だからあんまり来ることなかったんだけど、それから結構ちょこちょこ来るようになったんで、だからたまにね、あの、たまに来て神さんところ寄って、コーヒー飲んだりなんかしてますよね。最近ちょっとご無沙汰してますけど³⁸。

先ほど、「自立」という概念について、「複数の依存先」を持っていること、なのではないかという指摘をした。このエピソードから窺えることは、その依存先の一つとして Seesaw Books が機能しているのではないか、ということである。では何故そのように機能しているのだろうかということに関して、筆者は主に二つの理由があると考える。

一つは、Seesaw Books が直接的な支援活動（例えば生活保護の申請の同伴や家探しなど）

³⁸ 元入居者 A さんへのインタビューから。（2022 年 10 月 25 日実施）

については行っていないから、ということである。シェルターへの入居の経路は、基本的に JOIN や労福会といった支援団体からのものに限られるのであるが、直接的な支援活動については、そういった支援団体に委託しており、基本的にはスタッフは住居及び食事の提供のみを行うという形を採っている。これが故に、支援—被支援の関係性にそこまで囚われずに関係を構築することができている可能性がある。

もう一つは、Seesaw Books が特異な場所であるから、ということである。シェルターとは基本的に、社会から隔絶される場所であり、「何か困ったことがある際」に行く場所である。虐待や家庭内暴力といった事情で家を追われてしまった人を受け入れるにあたっては、むしろそうである必要すらある。先に述べた通り、JOIN に再び来所する人が何かしら問題を抱えている、というのも、基本的にはそういう場合の相談を受ける場所であるからだ。しかし、これらこのことは同時に、シェルター職員との関係が切れやすくなってしまうことを誘発しているようにも思われる。

その点、Seesaw Books はシェルターであると同時に、書店でもカフェでもある。それが故に、シェルターでの支援が終わったのちにも、今度は客として利用することが可能である。エピソードを取り上げた A さんについては、まさにカフェの客として利用しているという形だ。先ほど、支援—被支援に囚われない関係が構築されているのではという指摘をしたが、この原因の一つとして、書店が併設されているということは大きな意義があるのではないかと考える。

アフターフォローについて、積極的にすべきか否かについては議論が分かれることについて紹介してきた。また、特定の個人が積極的に介入すれば、その人の孤立が解消されるのか、「自立」に至るのか、ということについても疑問の余地があることについても述べた。この議論を踏まえると、Seesaw Books というシェルターが支援終了後に支援—被支援の関係性を外して訪れることができる場所として開かれている、ということはアフターフォローにおける一つの可能性を提示するものであると考えられる。

3-2 支援者—被支援者の関係

3-2-1 「友達になる」という関係

ここまでで、支援—被支援の関係という言葉が繰り返し出てきたのだが、支援者と被支援者が切り結ぶ関係については様々な形が考えられる。例えば、A さんの語りにおいて、「友達が増えた」という内容があったが、そのような関係の結び方も考えられるだろう。なお、この関係性については、オーナーの神輝哉さんも意識しているとのことであった。以下は、神輝哉さんに対するインタビューの抜粋である。

俺は理想論かも知れないけど、「友達」かな。そいつらと友達になっちゃいけない

とかそういう理論もあるのかも知れないけど、自分としては「友達」かな。全然なれないけどね、なかなか。でも心を通わず瞬間っていうのは凄くこういい感じであるというか、ああ心通っているなっていう瞬間もたくさんあった。専門家の人からしたら怒られるかも知れないけど。俺専門家じゃないからさ。（中略）

（秩序を重んじるような関わり方も）まあそれも正解だとは思う。そういう人からするとね、俺の考え方は甘いとか。そういう人たちのそういうスタンスにもリスペクトはある。自分の方が甘ちゃんかも知れないけど、まあでも少なくとも自分はそういうスタンスでやっている。「友達」になろうとするっていうスタンス³⁹。

JOINの小川遼さんも、近い内容を述べていた。

僕はクライアントと「クライアントはクライアント」みたいな感じで線引くのがあんまり好きじゃなくて、わりと結構友達っぽくなったりとかしてた。（中略）労福会に関わるのって結構長期の路上者達じゃないですか。友達にかなり近い感じですよ。ね路上の人たちは。一緒に飲みに行ったりもするし、やたらものくれるし。本当にものもらうんですよね僕が。お腹空いているように見えるのか分かんないけど⁴⁰。

確かに、ことに長期の路上生活者の方と関わる中においては、「支援をしに来ました」というより、「最近はどうですか」とか「この前僕風邪ひいちゃって」とか、おおよそフラットな関係で接しようとするのが筆者の場合は多い⁴¹し、この関係は「友達」に近いものがあると感じる。

3-2-2 「線を引く」という関係

他方で、神輝哉さんのインタビュー中にも言及があったが、秩序を重んじるような、ある種「厳格な」スタンスも存在する。例えば、ベトサダの代表であった山崎貴志は以下のように述べていた。

大学の時に体育会の運動部にいたんだけど、体育会の運動部みたいなのが理想だね。だけどそれは、あくまでも「民主的な体育会の運動部」。教えることはいっぱいあるんだ。生活のマナーっていうか。（中略）だから本当に、そうやって飯の食い方から生活指導っていうか教えるな。あとは、挨拶とかさ。おはようございますとか、こんばんはとか、飯食う時にはいただきますとかさ。本当にもうそういうこ

³⁹ 神輝哉さんへのインタビューより。（2021年4月5日実施）

⁴⁰ JOIN職員 小川遼さんへのインタビューより。（2020年8月10日実施）

⁴¹ 筆者自身が労福会の活動に参加する中での経験から。

とができない奴がいっぱいいるから。だからそれは、最終的には結局自分に跳ね返ってくるっていうか、自分が恥ずかしい思いをするじゃない⁴²。

この語りにおいて、「民主的な体育会の運動部」という言葉が用いられていたが、ここから、いわゆる「指導」的な関係を重視していることがうかがえる。「民主的な」とあるのは、いわゆる「四年生は神様、一年生は奴隷」といった理不尽な関係ではなくという意味合いであるようだ⁴³。一見すると厳しい態度にも思われるが、この当時のベトサダは就労支援に特化した団体であり、この厳しさは「一般的な企業に就職したときに恥ずかしい思いをしないように」という一つの思いやりとも取ることができ、こういった関係性も十分成立しうるものであろう。

この語りにおいて、もう一つ着目したい点は、支援者と被支援者の間に一定の線が引かれているという点である。先に引用した小川さんの言葉を借りると、「クライアントはクライアント」である、という一つの線だ。「運動部のような関係」を目指しているということを示べられていたが、そのような関係を考えてみた時に、先輩—後輩という一つの線があることと構造的には一致する。

むしろ、支援者と被支援者の間には「線を引くべきである」という考え方も存在する。ホームレスに至る人は、多くの場合において複数の困難な問題を抱えている。極端な話、「それら全てを解決するためになんでもしてあげたい」という考え方に陥れば、ともすれば共依存の関係にさえ至る可能性は否めない。また、解決できない問題に一人で取り組み続けてしまうと、それが徒労に終わってしまうケースも少なくないが故に、「バーンアウト」⁴⁴の状態に陥ってしまう可能性もある。故に、被支援者の間には、いわば「安全柵」としての線の一つ引いておいた方が良いという考え方だ。

3-2-3 当事者の問題を「自分事」として捉える

他方で、以下のように語った Seesaw Books 元利用者 B さんという人もいた。

最初に小川さんを通して神さんに入居できるかどうか聞いた時に、神さんが「次の年金支給日までいても良い」という風に言ってくださって、この人は心の優しい人だと思った。神さん自身の書いたエッセイなどを読む中で、「自分がいつ困窮するかも分からない」という風に、他人事としてではなく、自分事として捉えているということが分かった。

⁴² ベトサダ 元代表 山崎貴志さんへのインタビューより。(2020年6月25日実施)

⁴³ ベトサダ 元代表 山崎貴志さんへのインタビューより。(2020年6月25日実施)

⁴⁴ 基本的には「燃え尽き症候群」の意味であるが、ここでは支援者側が心理的負担を抱え込み、最悪の場合自殺などをしてしまうような事態も含む。

今困窮している人ならともかくとして、神さん自身は若くしてホステルを立ち上げるなど成功している中で、自分ごととして捉えていること、つまり同情ではなく「エンパシー」を持って考えていること、が凄いと思ひ、この人は「真に寄り添える人」であると思えた。

他の職員の人たちも良い人であった。全員、入居者のことを真剣に考えてくれていた。例えば、足の調子が良くない時に代わりに必要なものを買って行って下さった方がいたし、朝一番で必ず挨拶と体調を気遣う言葉をかけてくれた方もいたし、夜に見回りに来てくれた方もいた⁴⁵。

興味深い点としては、「自分事として捉えてくれた」という点である。このエピソードが示唆することは、「線を引く」ことが、支援者が被支援者の抱える問題について「他人事」として見てしまうという姿勢につながってしまうのではないか、ということである。本事例においては、「他人事」としてではなく「自分事」として親身に考えてくれたからこそ、「ラポール」⁴⁶が形成されたということが窺える。

どのような関係が良い、という考え方に関して解を出すことは本稿の目的ではないし、むしろ、固定した考え方を持つよりはケースに応じて臨機応変に考える方が良いだろう。歴史的に見ても、「友人としての思いやりを重視した時期もあれば、専門職としての知識や技能を持ったうえで関係を取り結ぼうとした時期もあった」（稲沢，2014：17）とされているように、時代によって変遷している。ただし、「自分事として捉え」てくれた故に、「真に寄り添」ってくれたと感じたという当事者の意見には考えさせられる点が多い。

3-2-4 「ラポール」はいかにして形成されるか

また、職員の方の話については、ラポールの形成という観点においては、労福会の活動との共通性を感じた。労福会の夜回りで会う人は、新規の人を発見するケースもありはするものの、ほとんどが「10年選手」である。それほど長い期間路上にいて、夜回り等で話しかけ続ける中で、ある日突然「そろそろ脱路上しようかな」という言葉を聞くことがある。

大抵の場合、路上にしていることには理由がある。それこそ、極端な例だが、「あまり字が書けない」という理由で福祉に繋がることができていなかったと思われる人もかつて目にしたことがある⁴⁷。それだけでと思われるかもしれないが、字が書けないことが恥と捉える人

⁴⁵ 元入居者 Bさんへのインタビューから。（2022年11月7日実施）なお、本人の希望により、発言の要旨の形式を採っている。

⁴⁶ ここでは、「良好な信頼関係」の意味。

⁴⁷ 筆者が2021年に労福会での生活保護申請同伴を行った際の経験から。

であるならば、それを他者に知られることは並大抵のことではないだろう。パンを渡し、話し続ける年月の中で、いつの間にかそれを知られても良いと思えるような関係が構築されているのだから、ある種魔法に近いとも感じる。一食食べれば無くなってしまふパンを配るその行為単体にかほどの意味があろうか、と思われるかもしれないが、ラポール形成という意味においては非常に大きな意味を持っている。先の B さんの語りの中にあった、挨拶をしてくれたり夜に様子を見に来てくれたりといった行為についても、同様のことが言えるのではないだろうか。総じて、一見地道で些細な活動こそがラポールの形成に大きく寄与するのではないか。

3-3 ホームレスの人は「他人」なのか

3-3-1 「劣等処遇」という考え方

先ほど、「他人事」という言葉が出てきたが、そのようなまなざしがあると仮定した時に、では本当にホームレス状態にある方は「他人」なのだろうか。つまり、私たちとは何かしら根本的に違う存在なのであろうか、ということについて考えてみたい。

まず、そのような人たちに対する処遇について考えてみる。生活に困窮している人であれば、それ相応の処遇をして良い、という考え方はよく耳にするし、自己責任社会を生きる我々にとってはそう理解が難しいものでもないだろう。端的な話、「成功した人」はそれ相応の暮らしをすれば良いし、そうでなくとも最低限度の生活は保証されるのでそれで良く、そうなるか否かは自己の責任である、という論理である。一見もっともではあるものの、本当に「自己の責任」のみに起因するのかという点に関しては決してそのようなことはない」と筆者は考えるが、ここでは多くは述べない。ともかく、どのような人であっても「最低限度の生活を保証しさえすればよい」という考え方は支持を得るものであろう。

実際にホームレスの人たちに対して行われている支援についても、その考え方に少なからず基づいている。労福会や JOIN の場合、フードバンクからの食料提供を受けているのであるが、それは賞味期限が近いもの⁴⁸が主である。JOIN のシェルターに活用されている建物に関してもそうで、委託を受ける中で家賃等との兼ね合いから築浅の物件はまず選ばないし、「とりあえず住める」という観点に重きを置けばそこはさほど重要にはならない。人によっては、「築浅な物件に住んでしまっただけでは、その後の生活でステップアップしていくという実感が持てない⁴⁹」という考え方を述べる方もいる。古めかしい話ではあるが、19世紀のイギリスの救貧法においては「劣等処遇の原則」という原則があり、これは「救済を受ける貧民の処遇水準は、自立して生活している労働者の最低水準より低くなければならない」（稲沢、2014：139）という原則であった。時代こそ違うものの、考え方自体について大差

⁴⁸ 菓子パンの場合は配布当日、食パンの場合は配布翌日、といった具合である。

⁴⁹ 筆者自身が JOIN の職員として関わる中での経験から。

はないように思われる。ともかく、最低限を提供すればよいという考え方だ。

先に挙げたBさんは札幌市外でシェルターを利用したことがあるとのことだったのだが、その経験を以下のように語っていた。

かつて Seesaw Books とは別のシェルターを活用したことがあるが、

- ・廊下と部屋を隔てるドアの建て付けが悪く、隙間風が吹き込み非常に寒い
- ・エアコンは壊れていると言われ、使えない
- ・鍵は外からしか掛けられず、就寝中に不安がある

といった問題があり、環境が非常に悪かった。他に類似の事業を利用したこともあるが、その住居もやはり、部屋の至る所にカビがあったり、空気が悪かったりと、環境に関して悪いと思われる点が多くあった。困窮している人たちが利用する施設であるからと言って、その程度でいいと考えるのであれば、それは間違いである⁵⁰。

ここで挙げられている他の施設の状況について、筆者が直接目にしたわけではないものも含まれるが、これまで述べてきた話を踏まえれば、決してあり得ない話ではないように思われる。その点、Seesaw Books の環境は良い、ということは概ね間違いない。そもそも Seesaw Books はゲストハウスの建物を活用したものであり、「利用者が心地よく滞在できるように」という意図が明確に存在している。では、それが何をもたらすのかということだが、筆者は当事者のエンパワメントに寄与するのではないかと考える。エンパワメントとは、「クライアントからパワーを剥奪して無力な存在に追いやっている抑圧的な環境に対し、それを改善していく包括的な援助活動を根底で支える理念」（稲沢，2014：263）という言い方ができるが、非常に穿った物言いをすれば、「劣等処遇」的な環境は被支援者にある種の烙印を押し、パワーを奪っているという解釈は可能であろう。本当に寄与するか否かを判断することはできないが、Seesaw Books はその意味では挑戦的な場所である。ホームレスの人たちに対して、私たちとは異なる、いわば「他人」としての処遇がまかり通る社会の中で、私たちと同じような環境に住むことができるという点においてだ。

また、それをさておくとしても「その程度でいいと考えるのであれば、それは間違いである」というBさんの指摘は、切実なものに思われた。

3-3-2 被支援者は「受援者」に留まるのか

先にエンパワメントの話の中で、「無力な存在」という言葉が出てきたが、被支援者は本当に私たちと違い、「無力な」人たちなのであるだろうか、ということについても考えてみたい。先に結論を述べてしまえば、筆者はそうは考えない。

⁵⁰ 元入居者 Bさんへのインタビューから。（2022年11月7日実施）なお、本人の希望により、発言の要旨の形式を採っている。

入居者の C さんという方の話から始める。Seesaw Books では半年に一度のペースで「大きな食卓」という炊き出し活動をしていて、筆者自身、ボランティアの形で参加しており、直近では 12 月 7 日に実施された際にも参加していたのだが、当日及び前日の準備を通じて、ずっと動き回っていた入居者の方が C さんであった。彼は、炊き出し前日に開催された「夜のパン屋さん」⁵¹という活動でも、売り子として働いていたとのことだったのであるが、何故 Seesaw Books での活動に関わろうと考えたのか聞いてみた。

C：そうですね、（手伝うように言われたわけ）じゃないですけど、ただここにいるだけだったら動いていた方がいいなって。（中略）やっぱ忙しいっていうのに慣れちゃってるんで、動いていた方がいいなっていう。そしたらもうこういうふうに、あれやってこれやってってやった方がいいなっていうのはありますね。

筆者：そうですね、シェルターの中にいたら。何もしない生活を作っているのかもしれないですけど、シェルターにいる時って。

C：そうですね。まあ一人で部屋にいる時よりは、こっちに行って忙しそうだなって思った時には、もう雪降った時には除雪もやったりとか。すごいどかって降った時に、そこあれ（除雪）してて、（中略）そういうのもやったりとか⁵²。

シェルターは、居所を失った方に対して一時的な居所として提供される場所である。そして、入居している間には何かしらの支援を受けることが前提となる。JOIN のシェルターの場合、利用者と共に「プラン」と呼ばれる指針を作成し、それに則って支援を受けることとなるし、Seesaw Books を利用した場合についても、紹介した団体が行う支援を受けることには変わらない。ただし、それが故に、入居者からすれば「ただここにいるだけ」となってしまうという可能性を示唆する語りである。無論、その状態が必要な人も多くいる。例えば、長期の路上生活で疲弊している人などであれば、取り急ぎ腰を据えて何かを考えることができる場所がある、ということには大きな意味があるだろう。

ただし、ここで指摘したいのは、「何もすることがない」という状態が、ある人にとっては「支援を受けるだけの人」、言うなれば「受援者⁵³」としての立場を固定する舞台装置として機能するのではないか、ということである。

⁵¹ 売れ残ったパンを回収し、それをホームレス状態にある方や生活に困窮している方などが販売することで、フードロス問題の解決と雇用創出を同時に図る取り組み。「ビッグイシュー日本」の事業の一つ。札幌では、Seesaw Books を会場として行われている。

（<https://yorupan.jp/>より。）

⁵² 入居者 C さんへのインタビューから。（2022 年 12 月 7 日実施）

⁵³ 筆者の造語。「受援」は通常、災害現場などで、支援を受け入れることを指す言葉である。（参考：<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/bousai-vol/product/juenryoku/juenryoku.pdf>）

同様の構図は、労福会の炊き出しでも見て取ることができる。労福会の炊き出しは、現在はかなりシステマティックに行われている。具体的には、当日のボランティア参加者の把握、役割分担の明確化、抽選制度を活用しての衣類の配布、を徹底するといった状況だ⁵⁴。(理由としては、炊き出しの頻度を上げたために来場者が増えたことへの対応、新型コロナウイルス感染症対策、の2点が主に挙げられる。)参加者は、なるべく騒がないように列を作って開場を待ち、弁当や衣類を受け取った後は、速やかに帰ることとなっている。以前は、炊き出し会場でご飯を食べ、そこで会員とのコミュニケーションを図り、悩みの相談の場も作るといった意味合いが大きかった⁵⁵のだが、だいぶ状況は変わっている。今すぐ元に戻すべきだとは思わない。先に挙げたどの対応についても、諸々の事情を勘案すれば合理的ではある。ただし、ここでも来場者は「受援者」となっている。

その点、Seesaw Booksの「大きな食卓」は少し様子が違った。以下はボランティアとして関わった際の観察記録の抜粋である。

・(12時開始予定のところ)10時30分ごろの時点で、既に6人ほどの参加者が集まっていた。Seesaw Booksの入り口のドアの前で立ってもらっていたのだが、その付近が少々窪地になっており、日陰であることも相まって、路面がしっかり凍結しており、最初は神さんが氷を砕くための道具(先が平らな鉄シャベルのようなもの)で砕いていたのだが、途中神さんがスタッフに呼ばれその場を離れて以降は、いつの間にか炊き出し参加者の方達が氷を砕いていた。その後神さんは多少手が空いたようであったが、特に何も言うことはなく、そこから20分ほどずっと参加者の方が氷を砕いていた。最初からいた〇〇さんは、「そこ硬いよー!」と氷を砕いている人に威勢よく声をかけていたが、自身はあまりやっていた。

・11時ごろになると、8人ほどの人がいて、やはりドアの前に待機していた。氷砕きはもう終わったようで、ずっと談笑している。手持ち無沙汰なのか、〇〇さんが、スタッフの人がドアを通る際に毎回ドアを開けてくれていて、「手動自動ドア」状態になっていた。

・私がタバコを吸っている間に、お菓子コーナーの大きな段ボールが一つ空いてしまい、吸い終わったら片付けようと思っていたところ、通りすがりの参加者がその段ボールを掴んで角に寄せてくれた。⁵⁶

ボランティアの人が少なかったこと、労福会の炊き出しほどこちんと役割分担をしてい

⁵⁴ 筆者自身が労福会の活動に参加する中での経験から。

⁵⁵ 労福会で外部講演等の機会に用いている資料から。

⁵⁶ 筆者自身が「大きな食卓」にボランティアとして参加した際の観察記録の抜粋。

なかったこと、も理由としてはあるのだろうが、いつの間にか一部の参加者の人たちが勝手にスタッフの手伝いのようなことを始めていた。そして、それを是とする空気があった。実際に役に立っているか否かといった問題は別として、「受援者」に留まらない姿がそこにはあった。労福会の炊き出しで目にする方も複数名いたが、心なしかいつもよりいきいきとしているように見えたのは気のせいではないと思う。「何か」に関わっているという意識は、精神的な面においては重要だと思われる。

そもそも、「何もすることがない」という語りの中の「何」はどういったものを指すのだろうか。Cさんの場合、これまで仕事をしてきたこともあり、仕事については該当すると考えられる。そしてそれは、「雪かき」や「手伝い」でも代替可能なものではあった。であるならば、「誰かのために役に立つこと」と言い換えることができるのではないか。そして、それができる環境があることは、「受援者」という一方的な構造を変えることができる一つのファクターなのではないだろうか。また、「誰かのために役に立つこと」は、被支援者にとって、ある種の自己有用感を持てるようになることにも繋がるだろう。先に、「いきいきとしているように見えた」と書いたが、筆者はその理由に自己有用感があると考えている。加えて、今述べたような内容は先に挙げた「エンパワメント」の議論にも通ずるものがあり、もし仮に、「受援者」であることが「抑圧的な環境」の一つとして機能するならば、その構造を変えることはエンパワメントに繋がるということも言うことができるのではないだろうか。

3-3-3 居住者による「自治」

もう少し「受援者」について考えるが、Cさんの語りでもう一点興味深い内容があった。以下はインタビューの抜粋である。

C：色々ものの使うにも洗ったか洗ってないか分からないよね、とか。マットとかあるんですけど、シャワー室に。それを（棚の）上は使ったやつ、下は使っていないやつ、で分けてやって。何枚ずつか洗ったりとか。

筆者：それは、そういうルールがあったっていう話？

C：あったっていうより作ったっていう。分かんなくなるから、そういう風にしようかっていう話。後から来た俺がいうのもあれだけど、こういう風にやんない？っていう。

（中略）

C：最初の時も、ご飯とか、お米があったんだけど、炊飯器もあって、で計量カップがない状態で、後から言いについて、飯はもう炊いておこうっていう話になって、飯は常に炊いておこうっていうことにして。

筆者：無くなったら誰かが炊くみたいなの。

C：そうですね。で、気づいたらもうやるっていう感じになってて。飯は常に3合炊いて⁵⁷。

基本的にシェルターでの生活のルールについては厳格に定められているわけではない。そのような状況の中で、居住者どうしが話し合いながら、ルールを決めて生活している様子が窺える。小さなことではあるが、居住者による「自治」の様子が見て取れる。JOINのシェルターの場合だと、かなり厳密にルールが定められていて、入居時にA4両面4～5枚に渡る説明をしている状況がある⁵⁸が、それとは対照的である。なお、今ではSeesaw Booksでも入居時に紙媒体でのルール説明はしているが、それは入居者の意見を元にして作られたものであるとのことだった⁵⁹。

この状況もある種、「受援者」からの脱却のための一つのプロセスとして意味があるのではないかと思う。自治は自分たちの問題について自分たちで決めるというあり方であり、いわば被支援者の主体性の回復に一役買っているのではないだろうか。

ただ、こういった居住者どうしに任せるような状況については、手放して推奨されるものでもない。居住者どうしに関わ(りすぎ)ることには危険も伴う。実際に、Cさんのインタビューにおいては、ルール設定を作っていくに当たって、他の居住者との衝突があったことも語られていた⁶⁰。シェルターを運営する側の考え方としては、そういったトラブルを極力避けた方が良いというものもある。以下は、ベトサダの代表であった山崎貴志さんの語りである。

部屋がおんなじであれば、世間話とかもしてるんじゃないか。ただ、えてしてなんていうのかな、よく言ってるのは、ここ別に友達作る場所じゃないからって、自分のことだけ考えてやってりゃいいからって。ともすれば本当に傷の舐めあいとかさ、あとは、入ってくる人間の中でその刑務所出てきて入ってくるやつも結構な数いるんだけど、まあそんなやつらといると「悪い相談」とかさ、あるんだ。だから、入居者同

⁵⁷ 入居者 Cさんへのインタビューから。(2022年12月7日実施)

⁵⁸ 筆者自身がJOINの職員として関わる中での経験から。

⁵⁹ 入居者 Cさんへのインタビューから。(2022年12月7日実施)

⁶⁰ 入居者 Cさんへのインタビューから。(2022年12月7日実施)

士の繋がりがって一言で言えばかっこいいけども、少なくとも俺はあんまりおすすめはしない。おすすめはしないというか、別にお前らここ友達作る場所じゃねえんだから、いい加減にせえよ、みたいな感じで。そういうことは言っている⁶¹。

例えば、「悪い相談」を受けたことで、退所後の生活がより「世間離れ」したものになってしまうというリスクを指摘する内容が述べられていた。他にも、精神疾患や障害を持つ方であれば、それこそ他の入居者がいないタイミングを見計らう等の工夫はするものの、他の入居者とトラブルとなってしまう可能性は考えられる。一律に、「居住者どうしのやり取りに任せる」というスタイルを取ることは難しい。しかし、「受援者」構造の脱却という視点に立った際には、意味がないと切り捨てるのも惜しいのではないかというのが筆者の考えである。

3-3-4 「他人事」ではない世界

この章においては、ホームレスの人をいわば「他人」と見るまなざしについて考えてきた。一つは、「劣等処遇」の対象となる人たちとして、もう一つは「受援者」としての考え方についてである。しかし、最後にもう一点補足したいのであるが、そもそも私たちとホームレス状態にある人たちの境も、紙一重であると筆者は考えている。以下は C さんへのインタビューの一部である。

東京の方で仕事の方をしていて、ホームレスの人たち見て、やっぱああはなりたくないなって思ってたんですけど、でも今状況が状況なんで、仕事を辞めてこういう状況になって、その人たちの気持ちが分かる、っていう。（中略）⁶²

ホームレスの状態に至る経緯はさまざまではあるが、それは決して自分とは遠いどこかの世界の話ではない。「ああはなりたくない」という世界は、意外と近くにある。それは何もこの人の語りからだけでなく、特に JOIN に来所した人の相談をお聞きする中でも強く感じることである⁶³。今般の新型コロナウイルスの流行によっても、その事実は浮き彫りになったになったように思われる。さすれば、支援者—被支援者という関係すらも揺らぎを持っているだろう。誰もがいつ支援者や被支援者になるのか分からないという世界に、私たちは生きているのだ。そのような世界にあっては、やはり「他人事」としては済まされないのではないだろうか。

⁶¹ ベトサダ 代表 山崎貴志さんへのインタビューより。（2020年6月25日実施）

⁶² 入居者 Cさんへのインタビューから。（2022年12月7日実施）

⁶³ 筆者自身が JOIN の職員として関わる中での経験から。

3-4 「支援」のあり方に関する考察

第3章での議論をまとめるにあたり、はじめに、ホームレスの人に対する支援の現場でよく用いられる「伴走型支援」という概念と照らしながら考えてみる。この言葉は、北九州でホームレス支援に携わっている奥田知志が提唱した概念であり、「伴走」という言葉はホームレスの人が抱える孤立状態、いわば「独走」状態の対義語として選ばれた。この概念については、以下に示す7つの理念から構成される。

第一の理念：家族（家庭）機能をモデルとした支援

第二の理念：早期的、個別的、包括的、持続的な人生支援

第三の理念：存在の支援

第四の理念：参加包摂型の社会を創造する支援

第五の理念：多様な自立概念を持つ相互的、可変的な支援

第六の理念：当事者の主体性を重視する支援

第七の理念：日常を支える支援

（奥田，2014）

「伴走型支援」は「伴走」を基調とはするものの、理念を見渡すと分かる通り、そのみに特化した支援の方法論というよりは、奥田が実践の中で見出してきた理念の集合体と呼ぶ方が近く、指し示す支援の概念は広い。ただし、支援の中で見出された理念であるために、ここまでしてきた議論とも関連性を見出せる点がある。

例えば、支援一被支援の関係について論じてきたが、これについては第一の理念と第五の理念に主に関連すると考えている。それぞれ補足するが、第一の理念について、奥田は家族の持つ機能の一つに、「役割の担い合いによる自己有用感提供機能」があるとし、「役割を見出し、自己有用感を得ることは、人生の目標を見出すことであり、それこそが安定生活を可能にする」と指摘している（奥田，2014：63-64）。第五の理念については、「可変的」とある通り、支援を行う上で支援一被支援の関係性の可変性を担保すべきという内容だ（奥田，2014：67-68）。

「役割を見出す」という点においては、3-3-2において取り上げた炊き出し参加者及び入居者がいつの間にか炊き出しを手伝っていた話や、3-3-3で取り上げた入居者どうしの「自治」の話が思い起こされる。それらのプロセスを通じて、被支援者が「受援者」に留まらない存在として浮かび上がる様子を描いてきた。補足すると、「『受援者』に留まらない」存在から一步踏み込んで、支援一被支援の関係性が逆転するような事例もある。1-1で取り上げたコミュニティカフェを設置している更生施設の事例においては、アフターケアの一環として地域の畑にて退所者と共同で畑の世話をするプロジェクトを実施した中で、支援者と被支援者の関係の逆転が見られたことが報告されている（堀江，2012）。そもそもなぜ、支援

者—被支援者の関係性について、「可変性」を求めるのか。堀江（2012）は、その理由は支援者—被支援者というある意味で非対称な関係が、非対等な優劣を伴う関係に結びつきうるためであるとした。筆者もこの意見には賛成である。堀江（2012）においては支援者—非支援者の関係の逆転から、Seesaw Books の事例においてはその関係の揺らぎから、非対等な関係を回避できる可能性が見えてきた。

また、3-3-1 以降でエンパワメントという言葉が度々登場するが、伴走型支援の考え方についても、当然これを踏まえている。例えば、第三の理念においては、社会的な排除やそれによる孤立状態の中で、まずその「無援」という環境を、伴走者が「何があっても伴にいる」という姿勢を示して変えることによって、その後の支援の土台となる信頼関係を構築しようと試みる（奥田，2014：65-66）。当事者の周囲の環境から変えていこうとする姿勢は、エンパワメントの根本的な思想と一致する。ただし、エンパワメントを援助理念として活用することについては「エンパワメントの逆説」と呼ばれる一つの問題があり、これは意図的に援助を提供しようとする、逆にエンパワーされない、すなわち、クライアントからパワーを奪ってしまうという逆説が発生してしまうという問題である（稲沢，2014：267）。これは、エンパワメントは本質的には当事者たちが自らパワーを獲得するといったプロセスであったはずが、援助理念に持ち込むと援助者がクライアントにパワーを獲得させる、という構造が生じてしまう故に起きる問題である。その点で、Seesaw Books の活動で興味深いのは、意図されずにあくまで結果としてエンパワメントが起きていたのではないか、という点だ。3-3-1 で住環境の視点から、3-3-2 で被支援者であっても Seesaw Books での活動に参加できる門戸が開かれているという視点から考えてきたが、いずれにせよ意図して行われているものではないように思われる。これによって、「エンパワメントの逆説」を回避できている可能性はあるだろう。

ここまで、伴走型支援と照らしながら考えてきたが、付言すると、「Seesaw Books の支援は伴走型支援であった」と言いたいわけではない。ホームレス支援の現場においてよく用いられる概念であったために引用してきたが、理念があまりに多岐に渡り、あらゆる個別具体的な事例も包含してしまいうるという点においては、少々大雑把すぎる概念なのではないかとも考えている。

伴走型支援と Seesaw Books の支援との関連はこれくらいとして、もう一点、そもそも支援とはどういう営為だろうかということについても考えたい。伴走型支援においては、被支援者と伴走することを通じて被支援者との間に生まれる「関係」こそがケアであるとし、その「関係」は社会という舞台で展開される「物語」への参加を促すものであるとしている（奥田，2014：50-51）。抽象的ではあるが、社会から排除された当事者が再度社会の中に包摂されていくために、まず支援者との伴走により関係の構築を試みることがケアないし支援であるという意味だ。もっと広い定義もあって、政治学者の J.C.トロントはケアについて、「もっとも一般的な意味において、ケアは人類的な活動であり、わたしたちがこの世界で、できる限り善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべ

での活動を含んでいる。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるものを含んでいる」(J.C.トロント, 2020:24)と定義している。あまりに広範な定義だが、「ケアないし支援は特別な活動ではない」ということを示唆している点は興味深い。そのような視点に立って第3章、特に3-1-3から3-2-4、について振り返ってみると、支援や被支援という言葉を用いなければ、ただ人と人との関係のあり方について考察したものに過ぎないという見方も可能だろう。

ここまでの議論で「ホームレスの人に対する支援」という一見すると私たちと程遠いところにあるような問題が、実はそうではないのではないかことについて少しずつ書いてきたつもりである。3-3-4で述べたように、貧困が顕在化する中で、ホームレスの人が抱える問題には「他人事」ではいられなくなっている。また、支援ないしケアという営みは、J.C.トロントが指摘したように、私たちの活動の大部分と関連する。Seesaw Booksのクラウドファンディングのタイトルに「境界線を溶かす」という言葉が含まれていたが、これは良い表現だと思う。いつの間にか私たちが引いていた「境界線」を溶かして考えた時、ホームレスの人に対する支援はとても身近な課題として立ち現れるように思われる。

4 おわりに

本研究においては、Seesaw Books の利用者の方のインタビューを中心として、自身が支援活動に関わる中で得た経験等を踏まえつつ、支援のあり方について考察を行なった。結果として、書店を併設しておりかつ職員が「支援」に深く関わりすぎているがゆえに、支援終了後に来ることができる場所として機能している点、そして、私たちと同じような環境で支援が行われ、加えて Seesaw Books で行われる諸活動への参加の道が開かれているということは、被支援者のエンパワメントに寄与している可能性があるという点が見えてきた。筆者が支援に関わるにあたっては、うまくいかないと悔やむことも多いが、その中で断片的ではあるが見えた「希望」の話を書き綴ったつもりではある。

最後に本研究に残された課題について記す。まず、インタビュー対象者の人数が非常に限られている点が挙げられる。より多くの方にインタビューをすれば、もう少し Seesaw Books における支援の全貌が見えてきた可能性は高いが、時間の関係で取り組めなかった部分であった。また、本研究については、あくまで筆者のこの時点での考察に留まり、将来同様のものを書こうとした場合内容が異なってくる可能性は大いにあり、その意味で非常に暫定的な内容である。ただし、後者については決して悲観するばかりではない。いつまで経っても悩み続けることができるという点においては、人生を懸ける意味があると筆者は考えている。

5 参考文献

【参考文献】

- 堀江尚子, 渥美公秀, 水内俊雄, 2012, 「ホームレス支援の関係性の継続と崩壊—入所施設のアフターケアでのアクションリサーチおよび支援関係の理論的考究—」, 『実験社会心理学研究』 55 (1), 1-17
- 奥田知志, 稲月正, 垣田裕介, 堤圭史郎, 2014, 『生活困窮者への伴走型支援』, 明石書店
- 越橋宜之, 2018, 「路上生活を経験した生活困窮者の人間関係」(本学卒業論文)
- 山崎克明, 奥田知志, 稲月正, 藤村修, 森松長生, 2006, 『ホームレス自立支援』, 明石書店
- 湯浅誠, 2008, 「貧困ビジネスとは何か」, 『世界』 (783), 191-197
- 湯浅誠, 2008, 『反貧困』, 岩波新書
- 広瀬義徳, 桜井啓太, 2020, 『自立へ追い立てられる社会』, インパクト出版会
- 稲沢公一, 岩崎晋也, 2014, 『社会福祉をつかむ』, 有斐閣
- J.C.トロント, 岡野八代 (訳), 2020, 『ケアするのは誰か?』, 白澤社

【参考ウェブサイト URL】(括弧内は最終閲覧日)

- ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果 厚生労働省 (2022年12月20日)
<https://www.mhlw.go.jp/content/12003000/000931322.pdf>
- ホームレスの実態に関する全国調査の概要(北海道分) 北海道保健福祉部福祉局地域福祉課 (2022年12月20日)
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/feg/hljittai.html>
- 「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書」 厚生労働省職業安定局 (2022年12月20日)
<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/08/dl/h0828-1n.pdf>
- 労福会 HP (2022年12月20日)
https://www.roufuku.org/?page_id=2203
- 札幌に、カルチャーと公共の境界線を溶かす『書店+シェルター』をつくりたい! (2022年12月20日)
<https://camp-fire.jp/projects/view/449809>
- 北海道の労働と福祉を考える会 総会資料 (2013年度) (2022年12月20日)
<https://www.roufuku.org/dir/wp-content/uploads/2014/09/2013nendo-soukai.pdf>
- 夜のパン屋さん HP (2022年12月20日)
<https://yorupan.jp>
- 「地域の『受援力』を高めるために」 内閣府防災担当 (2022年12月20日)
<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/bousai-vol/product/juenryoku/juenryoku.pdf>

謝辞

本稿の執筆は多くの方のご協力なくしては決してなし得ぬものでした。

まずは、インタビューを受け入れて下さった、元入居者 A さん、元入居者 B さん、入居者 C さん。皆様からお話をお聞きする中で、対話させていただく中で、どうか一つの成果としてまとめることができました。その意味で、この論文は、紛れもなく皆様と一緒に書かせて頂いたものです。心より御礼申し上げます。

次に、Seesaw Books オーナーの神輝哉さん。ご多忙にも関わらず、何度もインタビューに応じてくださり、加えて、施設の撮影等についても快く許可して下さり、本当にありがとうございました。また、本論文の性質上、Seesaw Books において開催されている数々の魅力的なイベントについては、論文中において触れることができませんでした。お詫びにはなりません、せめてこちらに記させていただきます。

そして、小川遼さんをはじめとする労福会の皆様。数年前に、快く活動に参加させて下さったことが本研究のそもそもの始まりでした。また、小川遼さんには、取材候補者のアポ取りや、草稿段階での内容のご相談など、本当に多大なお力添えを頂きました。

また、度々無茶をしては体調を持ち崩す筆者を遠くから支えてくれた家族や、内容を含む様々なことについて相談に応じてくれた友人たちにも、本当に感謝しております。

そして最後に、あまり出来が良い学生とは言えなかった筆者を、最後まで見離さずに根気強く指導して下さった宮内泰介教授と、執筆にあたり貴重なアドバイスを頂いた地域科学研究室の先生方に、心より感謝申し上げます。

数度書いておりますが、この研究はまだ途上です。皆様のおかげで成し遂げることができたこの論文を足がかりとして、今後も取り組み続けていきたいと思っております。